

風流

第三号



原爆投下は戦争犯罪の極み

理事長 山口洋一



国際芸術家センターの沿革が、一九六〇年、広島に被爆者を中心になり、被爆体験をもとにした舞踊劇「ノーモア・ヒロシマズ」の上演に端を発していることを思うにつけても、原爆投下をめぐるアメリカの身勝手な言い分に、私は激しい怒りを覚えずにはいられない。

広島・長崎への原爆投下でとどめを刺され、無残な敗戦で幕を閉じた大東亜戦争の結末は、日本人の心に深い傷を負わせた。あまりにも大きかった敗戦のショックで茫然自失となった日本人は、アメリカの巧妙な占領政策と日教組主導の戦後教育、そしてそれに悪乗りしたマスメディアの報道によって、戦後やすやすと自虐史観の催眠術にかかってしまった。敗戦から六〇有余年を経た今日においても、なおその心の痛みは癒えていない。

毎年八月六日と九日には、テレビでも新聞・雑誌でも、広島と長崎における慰霊行事の様子が伝えられるのはもとよりのこと、原爆の災厄にからむ種々の報道がなされる。広島・長崎の人たちの声や各界要人の見解がインタビューなどの形で取材される。こうした声に接して、何時も私が不審に思えてならないのは、「もう戦争は絶対にやめるべきだ」とか「日本は率先して核兵器廃絶の努力をすべし」といった言葉は耳にするが、「アメリカはひどいことをした」という発言は一切聞かれないことである。歴史を知らない幼い子どもが一番素朴な感想として抱く思いがこれではないかと思うのだが、子どもたちからもこうした声はあがらない。

まさかテレビや新聞が、意図的にこうした発言は落として、伝えないようにしているのではあるまい。戦後長らく日本人がとりつかれてき

た自虐史観の流れの中で、アメリカの言い分が大方の日本人にも、そのまま受け入れられてきてしまったのである。アメリカの公式見解によって、日本人の頭はやすやすと洗脳され、子どもたちまでもが「アメリカはひどいことをした」などとは思えない風潮に染まってしまったのである。

「原爆を投下しなければ、アメリカ側だけで百万人の犠牲者が出たのだ」、「日本は降伏を促すわれわれの最後通牒を拒否したのだ」、「日本はまだ強力な軍事力を持っており、広島は陸軍の中心、長崎は海軍と工業の中心であった」といったアメリカの見解が如何に欺瞞に満ちた、非道なものであるかは明らかであり、今や米国の一部の識者もこれをはっきりと認めている。

もはやあの時点では、戦争終結に原子爆弾の投下は必要なかったのであるが、それでもアメリカは、実際に原爆を用いて、日本の都市を破壊しつくす威力を見せつける「実験のための実験」として、何がなんでもこれを実施したかったのである。

米国立公文書館の資料によると、日本が降服の機会をつかもうと、必死になっている様子、特に、ソ連を仲介者として米英側との和平に漕ぎつけようと努めていた状況を、米側は十分承知していた。佐藤尚武駐ソ大使を通じてのソ連への働きかけに関するモスクワ・東京間の暗号電報はアメリカに解読され、トルーマン大統領には筒抜けだった。

しかしトルーマン大統領は、やがて米ソが対立する事態が到来するのが不可避であることを見越して、対ソ牽制の武器として、原爆の威力を誇示したかったのである。そこでトルーマン大統領は、日本がもう参っていることを知りながら、逆に原爆を落とす前に日本が降服してし

まわぬよう、周到な手を打ちながら、原爆投下に踏み切ったのである。

こうして、二つの都市を丸ごと破壊し尽くすという、前代未聞の非道な計画は実行に移された。これが残虐行為でないものであろうか。

これが戦争犯罪と言えないのであろうか。

実行後、計画に関与した当局者たちは、アメリカの名譽を保ち、大統領の威信を損なわないため、「百万人のアメリカ兵の命が失われるのを防いだ」等々、国民への説明には口裏を合わせ、これがアメリカの公式見解となり、戦後アメリカ人は頭からこれを信じ込まされることとなったのである。

実際には、トルーマン大統領としては、有色人種である日本人など虫けら同然にしか見ておらず、戦後世界におけるアメリカの覇権確立のためとあらば、原爆投下による日本の二都市抹消など、何とも思っていなかったのであるが、こうした大統領の本心を明かす者は誰一人としていなかった。

今日、日米双方にとって重要な両国間の関係を真に強固にするためには、アメリカが原爆投下に至った歴史の真実を率直に認め、勇を鼓して日本にこれを謝罪するのが一番である。それがなされれば、歴史の真実を見据えた、アメリカの勇気ある行動に感銘し、日本人がアメリカに対する好意と信頼感を深め、日米関係が確固たるものになることは間違いない。

私がこう述べたところで、もちろんアメリカがすぐに謝罪してくれるとは思わない。しかし、原爆投下を正当化せんとする米国の欺瞞は、とうとう歴史の批判に耐えうるものではない。私は、何時の日か、米国がこの行為について真剣な自己批判を迫られる日が来ることを確信している。

「御殿ささら」と呼ばれる優雅な舞

秩父市三峯神社の獅子舞を見る

日本民族舞踊団制作室は8月26日(日)に、埼玉県秩父市三峯神社境内において、「三峯獅子舞」の調査を行った。当日の参加者は舞踊団から石井早苗と女性舞踊手6名、IAC会員の小笠原節夫妻・木崎一男夫妻・中川芳和夫妻・藤田一郎・松村尚志、調査研究部会の飯田邦生、荻田雄司、並木孝の18名であった。天気は晴れで山の上ながら残暑は厳しく、演じる側にとってはきつい状況であったが、三方を建物に囲まれて日陰もあり、休み場所やトイレも完備しており、観客や調査団にとってはラクな1日であった。記録はVTR2台(部分撮り)、スチールカメラ4台、ノート記入1冊で行い、多大な収穫があった。以下は調査状況の報告である。

早朝4時からの「みやまいり」

「三峯の獅子舞」は三峯神社の摂社諏訪神社の祭日である8月26日に行われる。本来この獅子舞(「ささら」ともいう)は、諏訪神社の神事に奉納される舞であり、早朝4時から行われていた。(今年は6時から)この神事の舞を「宮参り」といい、行列を組んで三峯神社本殿からいくつもの末社摂社を廻った後、諏訪神社前で舞われる。行列は次のようである。○先花2、先笛2、大天狗、小天狗、先獅子(男獅子、女獅子、太夫獅子)、後獅子(男獅子、女獅子、太夫獅子)、道化(ヒョットコ、烏天狗など)後花2、唄方2。その時の舞は、出端、花割り、ジョウジョウネコ、カンメグリ、トウヒョウヒイ、一本花などで

一日の流れ

三峯部落の人たちが、摂社諏訪神社前に枝葉のついた朴の木2本を立て、注連を張り鳥居に見立てる。晩間のなかで三方5台の神饌と大皿に山盛りの小豆飯が供えられる。(小豆飯は参拝の人が一口ずつ食べる)

8月26日

「宮参り」が始まる。花笠4人、猿田彦(天狗)、笛方2人、唄方2人、獅子6人、烏天狗2人、ヒョットコ2人が本殿正面の石段を上り、摂社・末社を巡り、諏訪神社前で舞を奉納し、7:40終了。(これを見たのは秩父在住の中川夫妻のみ)

藤田・松村が到着。三峯神社本殿に参拝後、斎館・興雲閣(宿坊)・小教院に囲まれた「広庭」に入る。以降、舞踊手を先頭に参加者がさみだれ式に到着する。

「広庭」での最初の演目(これを庭という)である「かんめぐり」が始まる。四隅に花笠(を冠った人)が立ち、楽屋から大天狗を先頭に笛、6匹獅子、烏天狗、ヒョットコ、翁が行列を組み登場、舞場を一周してから舞う。9:58まで

「箆がかり」が始まる。三匹獅子舞が舞場中央に立てた箆にからむ。

舞踊手たちは小教院で三峯神社権禰宜であり、舞の指導者でもある千島幸明氏より獅子舞についてレクチャーを受ける。



(写真: 藤田 一郎)

「幣がかり」が始まる。三匹獅子舞が中央の幣にからむ。

昼食休憩。楽屋に招かれ、保存会長に挨拶の後、獅子頭(かしら)、面、太鼓、ささら、衣裳などを見せてもらう。頭は重く、これを冠って舞うのは大変との舞踊手の感想。細かく写真を撮る。のち興雲閣食堂で昼食。

「はたけ」が始まる。そのあとに「剣がかり」。舞踊手たちは途中で帰京。

敷きつめたゴザを取払い最後の「四本花」が始まる。舞の途中で獅子が見物の若い娘や子供を追いかけ回す。余興か。16:22終了。花をもらって下山。

西武秩父駅近くのレストラン「モンシャーレ」で賑やかに打ち上げ。

比較的様式的な曲とされる。ゆるやかな雅やかな舞

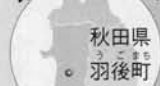
宮参りの後、9時半から広庭(中庭)で舞が演じられた。諏訪神社前の舞に対して、こちらは付けたりの舞であるが、「三峯の獅子舞」と言えば、この舞のことだと思ふ人が多い。今年演じられたのは、カンメグリ、箆がかり、幣がかり、はたけ、剣がかり、四本花の6庭(曲)。舞庭は5間四方、四隅に葉竹を立てシメナワを張り巡らす。その内側3間四方にムシロを敷きつめ、その上にガマゴザを敷く。獅子はこの上で舞うので「座敷ささら」と呼ばれる。

さて、演じる前に四隅に花笠が立つ。楽屋から行列を組んでカンメグリの演者が登場した。箆方を先頭に大天狗から6頭の獅子、その後に烏天狗、ヒョットコ、小天狗、翁、



小教院を背景に「剣がかり」の舞。右手前と奥に見えるのが花笠(上)。大勢で演じられた「はたけ」の舞(下)。(写真: 飯田 邦生)

最後に唄方とオールスターキャストであった。舞は比較的ゆったりとしたものである。獅子の腹に付けた太鼓を打ちながら入れ違い、絡み合い、輪になって舞う。6頭出ているが、動きは3頭のとくと変わりはないようである。(今日の演目では「はたけ」も6頭であった)道化たちは、もどきで、獅子と同じ振りを舞う。舞の流れをVTRで記録した。構成



重要無形民俗文化財
にしもの西馬音内盆踊り



獅子頭を調べる女性舞踊手。(写真：藤田 一郎)

や振りについては、後でこのVTRを詳細に分析しなければならない。唄方2人の唄が始まる。唄になると獅子はあまり動かず、唄の切れ目に太鼓を打つ、そして最初の位置に戻り、行列は舞場を一周して退場した。使用された楽器は笛方の篠笛、舞手の太鼓、花笠と一部の舞手が持つ「すりざさら」であった。

保存継承が次第に難しくなる

「三峯獅子舞」を維持する三峯部落は旧神

領で、もともと戸数が少ない、山間にあり米を産出しない。過疎化と高齢化がこの部落の若い世代も進んでいる。舞を受け継ぐ若い人たちが少なくなった。部落全員で支えてはいるが、受け継いでいくことが年々難しくなっている。と、舞踊団の舞踊手に対するレクチャーの中で千鳥幸明氏は語られた。積古の回数も前年に比べ半分は落ちていたとのことである。民俗芸能を維持継承している団体に共通する課題がここにも見られた。

東北地方の代表的な盆踊りである西馬音内盆踊りは、早くから日本民族舞踊団の演目の有力候補でした。1963年4月には東北方面総合調査として、本田安次、江口博、青山圭男、石井みどり、黛節子、有賀二郎の各氏を調査団として派遣しています。そして、2年後の1965年3月22日に国立教育会館・虎ノ門ホール(当時)に於ける「研究報告のための試演会」では早くも作品として上演されています。さらにその後、若手舞踊家たちによる現地調査も行われたのですが、衣裳製作にかなりの費用を要することなどから、未だ正式プロになっていません。今夏8月16日にIAC会員中川芳和夫妻が現地を訪れました。以下はその報告です。(編集部)

かがり火が映すほのかな哀愁

—西馬音内盆踊りを見て—

写真と文 中川 芳和 (IAC会員)

かがり火に灯が点り「寄せ太鼓」が鳴ると、西馬音内の「本町通り」の左右の通路から踊り手が姿を現し始める。19時30分〜20時45分までの第一部は子供中心で、「音頭」のみ。所要所に大人の踊り手が子供たちを誘導するように踊っている。1分間に5m位の速度で道路を取り囲むように反時計回りに移動していく。時が経つにつれ、その人数を増し、最後は500人ほどか。

21時00分からは第二部で、その前に踊る路面に砂が撒かれた。「がんげ」の踊りのなかに回転する所作があり、草履のすべりをよくするためである。大人の踊り手が増えて7割ほどが「編笠」に。男性

は1割弱と思われる。まずは「がんげ」が30分繰り返され、突然の停止の後にすぐに「音頭」が30分。そして、時間をだんだん短くしながら「がんげ」と「音頭」が交互に踊られた。終演に近くなると囃子は変調してリズムが次第に早くなる。踊り手の「彦左頭巾」の中から合いの手の声も漏れ始め、踊り手自身が高揚していく様子に分かる。23時55分拍手のなか盆踊りは終わった。「とり音頭」を聞くと思ったが、すでに櫓の下は混雑している。遠ざかる囃子を聞きながら駐車場に向かった。

「彦左頭巾」と「端縫」

西馬音内の衣裳は「藍」と「端縫」に大別される。「藍」は藍染めされた浴衣で、絞りと型染めがあるが、一見して型染めと判る浴衣でも、その意匠は様々で同じ柄はなかった。高校生以下の踊り手の

調査参加者のコメント

素朴な音色の中に暖かい安息が

小笠原節 (音楽家)

この獅子舞における音源は篠笛?の奏者による旋律と、舞手による所作と一緒に打たれ羯鼓?のリズムによって構成されていると思われる。旋律を司る笛方は常に舞手の動作を理解した上で旋律を奏しながら、舞との調和を保っていた。これは、舞手の動作をより美的に表現する(いわゆる間)のための一つの慣例的な手段なのかも知れない。

これらを西洋の音律や音階が支配的な現代の音楽と同じ土俵で比較することは、土台無茶な話だと思いが、一方でこの音楽を現代人にも理解させるなら何かの方法(ある程度のストリー性、音楽的な統一性等々)も必要だと思いつきながら、いまだに、あの三峯の現場の音が自分の脳裏のどこかにこびりついて離れない。これはどこか舌足らずな音楽と素朴な音色の中に、民族的な暖かい安息を見出すことが出来るからと思つた。

若々しい舞手を大切にしたいが

並木 孝 (調査研究部会)

若い舞手が一生懸命舞う姿には好感を覚えた。積古不足の感は否定できないが、自分たちの舞をしっかりと受け継いで行こうと努力する姿には共感したし、心からの応援をしたい。一方、笛方、唄方は人数も少なく、高齢化が進んでいるようだ。この麗しい伝統がいつまで続くか、心もとない気もする。映像をしっかりと残すとか、採譜、採詩をしておくとか、この方面でNPO法人国際芸術家センターの果たす役割に大いに期待したいところである。

〈今後の調査予定〉

日本民族舞踊団制作室では、10月27・28日(土・日)に秩父浦山に於いて「浦山の獅子舞」の調査を行います。また、12月3日に、日本三大曳山祭りの一つである(あとの二つは京都祇園祭り、飛騨の高山祭り)「秩父夜祭り」の見学会を開催します。会員のご参加を歓迎します。詳しくは「制作室月報」(10月15日・11月15日発行)をご覧ください。



衣裳はほとんど「藍」で、小学生以下を除いて9割以上が「彦左頭巾」で顔を覆っている。これは亡者を連想させる黒い覆面で、由来はわかっていないようだが、素顔を隠すことで羞恥心を取り除き、より大胆に踊るのが目的のようである。しかし、暑そうだ。実際、踊りが終わると頭巾を跳ね上げて素顔をさらす子供が多かった。

「端縫」は四、五種の絹布を左右対称に端縫った衣裳で、もとは冬に襦袢の上に着けた綿入れの防寒着である。それを盆踊り衣裳に取り入れ、見物人の目を意識して色や柄を工夫して現在に至っている。「端縫」の踊り手の被り物はほとんど「編笠」で、「風の盆」と同じように踊り上手ほど深く被り、ほかの踊り手を見なくても自分の踊りを乱さない誇りを表している。深「編笠」の下に隠れた女性の素顔を想い描くのは楽しいことだ。

西馬音内の扮装で共通するのは「草履」と「編笠」と「手拭」だけであった。「彦左頭巾」は手作りなのであろう。黒色なのと両目のくり抜きの中間部分、眉間に黒いボタンが共通なだけで、素材も長さもまちまちである。個性を覆い隠す覆面に個性があるという不思議な想いを味わった。

「音頭」と「がんげ」

西馬音内の踊りには「音頭」と「がんげ」がある。男踊りと女踊りの区分けはないが、優雅で流れるような踊り方は、「風の盆」に通じる雰囲気がある。囃子には他に踊り開始前の「寄せ太鼓」と「とり音頭」

藍の浴衣に彦左頭巾をつけた踊り手(上)。

端縫の衣裳の踊り手は編み笠を深く被っていた(下)。

事務局便り

▶「トルコの旋回舞踊・セマー」の創始者メヴラーナの生誕800年(ユネスコ国際メヴラーナ年)を記念し、コンヤトルコ神秘楽団が来日。その宗教的な儀式である貴重なパフォーマンスは8月29日に新百合ヶ丘の昭和音楽大学で開催、IAC関係者にはトルコ大使館からその公演へのご招待状をいただきました。ゆったりとした唄と演奏に合わせて白いスカート状の衣装のセマーゼン(修道士)が円を描きながら回り続けることで神に近づく、というその舞台は、観客をも不思議な空間に誘い込むような感じがしました。今後とも、各国在日大使館などとの協力で様々な地域の珍しい文化を会員の皆様にご紹介したいと思います。

▶「アラスカへの文化使節の派遣」は今年は10月8日から24日を予定しています。昨年のシトカ(ロシア領当時の首都)での交流が好評だったことで、今年は、ジュノー(アラスカ州都)でのジュノーシンフォニーとの共演というオファーもいただきました。藤田めぐみ、世良留実、後藤環、藤野由美子、小田切藍良の5名のIAC会員の皆さんが素晴らしい文化使節団としてアラスカとの相互理解を深める役割を果たしてください。

▶「尺八コンサート」を12月23日(日)午後、文化シャッターBXホールで開催いたします。佐野鈴霏(日本民族舞踊団・音楽団)とその門下生、箏、三絃など総勢20名の純邦楽演奏会です。詳細は追ってご案内します。ご期待ください。

(理事・事務局長 金屋輝美)

踊るて跳ねるて 若いうちだよ
 おらよに年ゆけば なんぼ上手に
 踊りみせだて 誰も見る人ねえ
 お盆恋しや かがり火恋し
 まして踊り子 なを恋し



があり、踊りとは対照的に野趣あふれる賑やかさで、「風の盆」とは小ささか趣が異なる。楽器は笛・大太鼓・メ太鼓・三味線・鼓・鉦などで特に笛は秀逸であった。鳴り物のほか、地口(音頭の歌詞)と甚句(がんげの歌詞)の歌い手が加わる。地口は秋田音頭とリズムが良く似ていて、歌うというより喋りというに近く、風刺やエロティシズムを漂わせた多彩なものである。甚句は地口に較べるとずっと詩歌性が高く、節回しも単調で哀愁が漂うが、土地柄か洒落や風刺を含んだ歌詞もあった。地口と甚句から一節ずつ歌詞を紹介する。

募集のお知らせ 詳しくは事務局にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

- NPO 法人国際芸術家センターでは、活動趣旨にご賛同・ご支援いただける法人、個人の会員を募集しています。
- 日本民族舞踊団では研究生を募集しています。体験レッスンも行っておりますので、興味のある方はぜひご参加ください。

IAC 会報 「風流」 第三号
 2007(平成19)年10月1日発行 (年4回、1・4・7・10月発行)

発行: NPO 法人国際芸術家センター (IAC)

編集: 「風流」編集部

〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-20-10-206

TEL: 03-5426-2047 FAX: 03-5426-2048

E-mail: iactokyo@d1.dion.ne.jp

<http://www.d1.dion.ne.jp/~iactokyo/>

